

# AR CA DIA

50  
AUTUMN 2011

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



  
OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽 一 カラスのかたち

館長 榊原悟

館長の榊原です。

これから展覧会や講演会など当館の催すさまざまな行事で、皆さんにお目にかかる機会もあるかと思えます。その節は宜しくお願い申し上げますが、このアルカディア誌もまた、そうした皆さんとの交流の場としたい。

その巻頭のエッセイは、館長の領分だという。年四回、折おりの展覧会や季節のことなど内容は自由。だが今後つつがなく責を全うするためには、自らの経験を基盤に一文を綴る以外に、手はあるまい。

平々凡々を絵に描いたような十四年間の大学生活、しかしその間、日本美術史担当の教員として、調査した美術品は少なくない。さらにそれ以前、二十一年余りの展覧会屋としての学芸員生活を送った。むろん、そこではほぼ日常的に美術品に接していた。自ら展示した作品だけではない。展覧会の準備の段階で調査したものの、展示するには至らなかったものや、展覧会の企画に直接係わりない作品など(そうした作品の集積が、次の企画を生む場合もある)、囁目した作品は数知れない。その中には現在も忘れ難いものがある。

このエッセイでは、そうした調査はしたものの、あまり触れることのなかった作品や、すでに定評がある作品でありながら、少し視点をずらし、見方を変えることによつて、思いもかけない姿を見せてくれるものなどを紹介し、その魅力を述べてみたい。題して、

眼の極楽

とする。「眼の楽園」というわけだ。アルカディアを標榜する本誌に最も相応しいタイトル、と一人悦に入っている。

が、それにしても日本の古美術は、抹香臭いか、何か鑑賞するのに面倒な作法があるのではないかと、ともすれば敬して遠ざけられがちなのだが、あまり構えないで虚心に見れば、実はさまざま眼の極楽を味あわせてくれるはずだ。意外なかたち、斬新な意匠性、当意即妙の即興性、そして見立ての趣向と、その魅力を語る言葉は多い。連載でもそこに焦点を絞るべきだろう。

そこで今回、取り上げたいのは、これである(図二)。意外なかたちのつもりである。

何に見えるだろうか。とりあえず作品を紹介するのに名無しの権兵衛ではまずいだろうから、『塗鴉図』と命名した。確かに一本の木の幹の中途に、鳥が留まっているようにも見えないか。その留まっているものは、先端が尖り、鳥の嘴のようだ。尾羽もある。黒く塗りたいくつたから、この鳥を鴉と見、『塗鴉図』とした。

だがこの鴉、とくと見て貰いたい。背の方に、二本、三本：墨汁が流れ出ている。周辺にも墨汁が飛び散っているではないか。頭部あたりにも黒ぐろと墨溜りがある。おそらくこの部分に墨をたっぷり含ませた筆の穂先をこすり付けたのだろう。その際、墨が画面に飛び跳ねたのだ。そういえば幹の中途に逆三角形になった横線の重なりがあるが、何か意味あるかたちではなさそうだ。その中で、強いて

言えば鴟と樹幹のようなかたちが認められるところから、『塗鴉図』と呼んだままで、実は画面に現れたかたちは、敢えてそう呼ばねばならないほどの意味はない。単なる落書き＝筆のたくりと言ってもよいだろう。

ではこれは何なんだろう。それを教えてくれるのが画面左下に入れられた識語(制作の経緯などを述べた書き込み)である。

狩野千千代四歳筆

明暦二年三月十一日 探幽(花押)

狩野探幽(二六〇二〜七四)が明暦二年(二六五六)三月十一日に記している。探幽といえは、滝山寺の東照宮拝殿長押の上に掛けられた『三十六歌仙絵額』が彼の作で、岡崎市民にも馴染みだろう。江戸時代最大の巨匠である。その探幽が、四歳の息子千千代(のちの探信 一六五三〜一七一八)に描かせて、麗々しく識語を入れたものこそ、これであった。

となれば、先に筆をのたくらせただけと見たことにも得心がいくに違いない。たかが四歳の子供の絵である。せいぜいこんなところだろう。それに誇らし気に識語を入れる。一代の巨匠も、やっぱり人の親というところか。

しかし、そのたくり画を、来日した明の知識人であり書もよくした独立性易(のち隠元禅師の弟子となる。日本における唐様の書の祖である。二五九六〜二六七二)に見せ、賛を求めているあたり、この親もなかなかのもの。明暦二年の初夏(四月)探幽が、当時、摂津の普門寺に在った隠元に面会して

いることは疑いがないから、その折、独立にも会い、賛を求めたのであろう。そういえば探幽は、この前後、千千代に盛んにのたくり画を描かせ、ついには後水尾上皇の観覧までも願ひ出る始末。子煩悩を通りこして、もはや親バカというべきか。

そのいくつか遭る千千代ののたくり画からもう一点、明暦三年五歳の時のものを挙げておく(図二)。こちらは三尊形式をとり、中尊に相当する部分を千千代、左右の脇に一歩へりくだつて親爺が「枇杷」と「瓜」とを添える。千千代は、一歳年長になったのに、相変わらずのたくり画。上手くなるどころか、『塗鴉図』に較べれば、むしろ下手になっている。と言えば、もうお分かりだろう。

そう、『塗鴉図』の方は、間違いなく父探幽の筆が入っている、とみる。垂直に伸びた樹幹や鴟の尾羽、頭部の嘴など細部には探幽の筆によってかたちの調整がなされたのだろう。千千代に描かせたものの、見るに見かねたのだろうか。夏休みの工作の宿題を手伝っているうちに、結局そのほとんどを作ってしまった、そんなお父さんの姿が思い浮かぶ。

だが、敵もさるも、そんなのたくり画に賛を求められた独立も、あなどれない。その散文に、なんと、

塗鴉

の一語を用いているのだ。図の命名も実はこの賛の一語によることは言うまでもない。

ところでこの一語、現代の中国でも使われている。

勿信手塗鴉

これで「落書するな」の意である。つまり独立は、のた

くり画のかたちのすべてを承知していたのだろう。しかし、こうして筆に慣れていけば、やがて絵の上手になれるに違いない。

絵師の子の蚯蚓はやがて竜になり

『誹諷柳多留』のこの一句は、その間の事情を見事に言い当てている。

となると千千代の蚯蚓のたくり画がどうなったか、である。本当に竜になったのか興味のあるところだろう。が、これについては、いざれお話する機会もあるだろう。いまは少なくとも、「出藍の誉れ」とはいかなくなっただけを言い添えておく。



図1.「塗鴉図」



図2.「蔬果図」 熊本・本妙寺蔵

## ESSAY



## 三河浄土宗寺院の名宝

—浄土へのいざない—

浦野加穂子



《法然上人坐像》鎌倉時代 円福寺蔵（岡崎市指定文化財）

平安時代の末期、末法の世に惑う人々を救うため、ひたすら念仏を唱えることで往生を果たすという専念の教えを広め、浄土宗を開いた法然。今年には法然上人の八百回忌の年に当り、奇しくもその高弟で真宗の開祖である親鸞の七百五十回忌でもあるため、全国各地の浄土宗や真宗の寺院で法要や寺宝の公開等が行われています。この機会に当館でも、法然の人物像と三河の浄土宗寺院に伝わる名宝を紹介する展覧会を開催します。

法然(一二三三〜一二二二)は、美作国(岡山県)の武士の家に生まれ、幼くして父を亡くし、その遺言により比叡山で出家しました。修行を積む中で中国唐時代の高僧善導の著作『観無量寿経疏(観経疏)』により、法然四十三歳の時、専念念仏によりあらゆる人が極楽往生できることを確信しました。後に浄土宗ではこの承安五年(一二七五)を立教開宗の年としています。比叡山を降りた法然は、京都吉水にて人々に教えを説き、後にその思想を『選択本願念仏集』として大成しました。厳しい修行や造寺等の多くの善行(作善)を積んだ人のみが往生で

## EXHIBITION

きるとする旧来の浄土思想とは大きく異なる革新的なその教えは、庶民はもとより武士から有力貴族まで幅広い階層に広まって行きました。しかしこれに危機感を抱いた旧仏教勢力の念仏停止を求める動きが激しくなり、建永二年(一二〇七)ついに専念念仏は禁止され、法然は四国へ流罪となりました。後に赦されて帰京しますが、間もなく東山大谷(京都市東山区)で八十年の生涯を閉じました。

法然は多くの優れた門弟に恵まれ、師の没後、その教義の解釈をめぐって諸流派が生まれました。西三河へは十五世紀に法然の高弟弁長を祖とする浄土宗(鎮西派)が進出し、松平氏の帰依を得て建立した大樹寺(岡崎市)を中心に発展しました。さらに法然の高弟証空の弟子立信を祖とする浄土宗(西山深草派)も法蔵寺や崇福寺などの三河十二本寺を中心に教線を拡大し、その末寺の大半が三河に集中しています。

三河の浄土宗寺院には、法然の教えを伝える史料や仏教美術の名品の数々が所蔵されています。専念念仏の広がりのおかげで、祖師像として数多く作られた法然の肖像画や、絵解き

などを通じて布教に大きな役割を果たした法然の生涯を描いた絵伝。阿彌陀如来の本願を信じ、西方極楽浄土への往生を説く浄土教に基づいた阿彌陀如来の姿や当麻曼荼羅をはじめとする西方極楽浄土を表した阿彌陀浄土図、その浄土から阿彌陀如来をはじめ諸菩薩が来迎する様子を描いた阿彌陀来迎図などがあります。

今回の展覧会では、岡崎市内の名刹をはじめ、豊田、豊川、西尾など三河の浄土宗寺院に伝わる至宝約二百十件を一堂に展示し、法然の生涯や業績を紹介するとともに、教えを受け継ぐ三河浄土宗を代表する二つ流派を紹介し、そこに育まれた浄土教美術の粋を御覧頂きます。さらに寺勢の盛衰に深く関与した松平氏、徳川氏など三河の有力武士との関係を示す資料により、浄土宗寺院をめぐる三河の歴史を辿ります。

八百年に一度の大遠忌、この稀有な機会に巡り合った縁に導かれ、本展を通じて激動の鎌倉時代に仏教改革運動の先駆者として歩み続けた法然の人物像と、法然の説いた極楽浄土の世界へ思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

会期：平成23年10月8日(土)～11月20日(日)

夭折詩人画家

「火だるま 槐多(高村光太郎の言葉)」  
ゆかりの地岡崎でよみがえる!

12月3日(土)から開催される「村

山槐多の全貌」展の準備を進めていま  
す。槐多は大正の時代を情熱的に駆け  
抜けて散った夭折の詩人画家です。

早熟で多感であった彼は、絵画と文芸  
に鋭い感性を発揮しました。しかし極  
度な貧困と失恋、制作上の苦しみな  
どから放浪と退廃の生活を送り、激  
しくも短い22年の生涯を閉じた稀代  
の天才でした。

槐多が天才だったと言われてもど  
くとこないかもしれません。しかし例  
えば、芥川龍之介が、槐多13歳頃の詩  
を「作者の心には、直ちに我等を動か  
すべき芸術の土の尊さがある」と絶賛  
し、横山大観が、槐多18才の水彩画を  
気に入って自前で買い上げたと言け  
ば、なるほど、これはただ者ではなさ  
そうだ…ということが分かっていただ  
けると思います。

大正期の「デカダンス」と「浪漫」を  
体現した槐多の心の奥底には「美しい  
ものへの恋情」「古代と野生への憧れ」  
「死に向かう血と、生きようとする

力」などが渦巻いていました。彼はそ  
こに、みなぎる情熱をもって、あるい  
はまた驚くほど繊細で敬虔な純真さ  
によって、芸術による精神の高みを見  
いだそうとしました。その独自のまな  
ざしから生まれた作品の凄みは他に  
類がなく、現代の我々の心にも、まっ  
すぐに鮮烈に訴えかけてきます。

槐多は横浜生まれと伝えられていま  
すが、特定される資料等は現存せず  
実際には不詳。出生についての唯一の  
記録は、この岡崎に出生届けが出さ  
れて本籍を置いているということだけ  
です。これは大変興味深いことで、詳  
しい調査をしていこうと思っていま  
す。

この展覧会の準備、調査を進めるう  
ちに、いくつもの槐多の新発見作品と  
出合うことができました。中には贋作  
のようなものも何点か目にしました。  
とりわけ驚いたのは、花を描いた八号  
の油彩画と対面した瞬間でした。槐多  
が夢中で風景や静物を描いていた初期  
のものと思われませんが、画面には驚く  
ほど深遠な空気と底知れぬ力に満た  
されています。技術もこれほどまでに  
あつたのかと再認識させられますが、  
何よりもその対象把握の凄みは、やは

## EXHIBITION

り他の誰でもない槐多の絵なのです。  
まだまだ謎の多かった村山槐多、それ  
が今回の新たな資料によって少しずつ  
解明されてきました。  
本展は、これらの新発見の作品をはじ  
め、槐多作品約250点、関連資料を  
含め総数350点にも及ぶ空前絶後  
の規模となります。

今回これほどまで多くの作品を集  
めることができたのは、長年槐多の研  
究に携わらせていただいた折に、  
たくさんの方々の研究者や所蔵家の方々と  
の交流があり、その皆様の温かなご  
協力のおかげと感謝しています。所蔵  
館の学芸員の皆様からも、特段のご  
配慮をいただいたり、「楽しみにしてい  
ますから頑張ってください」と激励  
のお言葉をいただいたりと有り難い  
かぎりです。やはりこれは槐多の持つ  
不思議な魅力のおかげだと改めて  
思っています。

全国50ヶ所以上の美術館と所蔵家  
の方々の特別なご協力のおかげで実  
現する奇跡ともいえる規模となった  
「村山槐多の全貌」展。槐多の魅力の  
すべてが集結するまたとないこの機  
会に是非ともご覧いただきたいと思  
います。

# 村山槐多の全貌

—天才詩人画家22年の生涯—

村松和明

会期：平成23年12月3日(土)～1月29日(日)



《尿する裸僧》1915年 信濃デッサン館蔵

東北の話が続きます。山形県庄内地方には二度、北の酒田と南の城下町鶴岡に行っています。酒田市の本間美術館へは、五会場九ヶ月に渡った平賀源内展の最終返却の旅でした。仙台から秋田へと東北横断、この日は朝から曇天の中、国道7号線をトラックでひたすら南下。芭蕉の愛した象潟もあつげなく通過し酒田へ。司馬江漢の版画作品返却が済むとすぐに新庄へと帰路につきました。西の塚にも比べられる重要な交易拠点として繁栄した酒田の町ですが、見るものすべてに灰色のフィルターがかけられ、本間家別邸に建てられた美術館に往時の姿を垣間見ると、みで早々の退却です。旅人にとっては町の印象は一日で決まってしまう、美術館の田中さんのやさしい応対だけが心に残りました。

そんな印象から同じ庄内の鶴岡入りは気の重いものでした。徳川四天王展の酒井家資料を致道博物館へと返却する旅で、長岡で仕事を済ませ、新潟経由で今度は7号線を北上です。十一月下旬の寒々とした日、荒れ狂う日本海を横目に庄内平野を指すと灰色の印象が徐々に重

たくなのしかかつてきます。もうすぐ鶴岡市街。山あいを抜けると突然目に飛び込んできたのが鳥海山の姿でした。その神々しさは曇空のもともども際立ち、均整の取れすぎた富士山とは違う、それ以上の衝撃でした。庄内平野は信仰の山々が取り囲みます。自然への畏怖を感じさせる羽黒山、荒涼として死と絶えず隣合わせの月山などと異なり、重量感を持って構える鳥海は神仏の降り立つ山、麓から見る山に他なりません。ホテルに入り暗闇が包むまで見つめていました。酒田来訪時にも見ているはずなのに、ずっと背を向けていたのだろうかといぶかるばかりでした。酒井家代々の当主が明治以降もこの地に愛着を持ち住み続けるのもこの山あつてのことでしょうか。



酒井氏庭園(昔は鳥海山が借景となっていた。)

## COLUMN & TOPIC

### 社会人体験研修を終えて

稲垣満春

当館では、毎年八月に、博物館学芸員資格取得のための博物館実習をはじめとして、中学生の社会体験学習、小中高の教員十年経験者をはじめとした社会人体験研修などの受入を実施しています。十月に刊行されるアルカディアでは、例年、博物館実習の報告を掲載してきましたが、今回は八月二十三日(火)から二十五日(木)までの三日間に実施した社会人体験研修の報告をしたいと思います。

に收藏されている民俗資料の清掃、分類、棚への収納など、実際に資料を手にとってもらい、博物館資料の取扱の基本について学んでいただきました。また、展覧会の広報活動や教育普及活動、そして博物館が抱える様々な課題について理解を深めていただきました。

今年当館が受け入れたのは、教員になって十年目の岡崎市立六ツ美北中学校の数学の先生です。研修初日は、午前矢作中学校、南中学校、額田中学校、午後に葵中学校と市内四校の中学校が展覧会鑑賞の目的で来館したため、早速その対応のお手伝いをしていただき、いきなりでしたが当館の教育普及活動の一端を体験していただきました。二日目は、館の施設管理と運営、そして展覧会の企画から実施までと、博物館運営の基本について理解していただくとともに、おかさき世界子ども美術博物館と市美術館の見学を行いました。最終日の三日目は、当館

さて、今年は中学校の数学の先生を受け入れました。「数学の先生が美術博物館で研修？」と思われるかもしれませんが、当館で研修を希望される先生は美術や社会の先生ばかりではありません。これまで美術館や博物館に足を運ぶ機会のない先生たちも受け入れています。研修終了後はどの先生たちも博物館の良き理解者となっていたと思っています。

三日間という非常に短い期間の研修で、博物館の活動すべてを体験していただくことはできませんが、今回の研修で得たことを学校の授業をはじめとして、さまざまな学校の活動の場に生かしていただけたらと思います。



## 「紙上名品展」

### タペストリー「ダイアナとアクティオン」

ちよつと変わった取蔵品を紹介します。多分国内の他の美術館・博物館にはないのではと思う資料で、十七世紀、フランドルで室内の壁掛用装飾品として製作されたタペストリーです。ローマ神話の狩猟の神ダイアナの水浴姿を太陽神アポロの孫のアクティオンが偶然目にしてしまった光景が表現されています。物語はダイアナの怒りによりアクティオンが鹿の姿に変えられ、自らの猟犬に食べられてしまうという悲劇へと続いていきます。綴織の一種で、太い横糸で絵柄を表現した縦二三五・五、横二八六cmの堂々たるものです。

家康の生きた時代、フランドル地方はタペストリーや毛織物生産を基盤に商業が発展、ヨーロッパ経済の中心地のひとつとして繁栄していました。その様相を物語る好資料です。また、日本との繋がりも認められ、五枚一組のフランドル製タペストリーが輸入されて京都祇園祭の「鯉山」などの山鉾や大津祭曳山の装飾、加賀前田家などに現存しています。(荒井)



### 石川貫河堂筆 帰去来図襖絵 江戸時代後期

江戸時代の岡崎の絵師といえます。まず名を挙げねばならないのが石川貫河堂(1780~1859)であろう。旧岡崎市史の随所の挿図に採用された市内の名所・旧跡・寺社の鳥瞰図の作者として知られ、その原図(三河名勝誌)は惜しくも戦災で失われ、現存していないが、忠実に景観を描いた図は現在の私たちに貴重な情報を提供してくれる。地域に密着したその活動の姿勢にかねてから私が興味をもった画家でもある。この貫河堂が六名の大庄屋であった斎藤家の襖に描いたのが「帰去来図」である。同図は中国陶淵明の詩文「帰去来辞」に詠われた内容を絵画化したもので、宮仕えをやめ、故郷に帰る場面を描くものである。隠遁生活や理想郷への憧憬は江戸後期の地方文人たちに広がり、本図を画いた貫河堂にもその嗜好性があったとみられる。十王町西照寺に門人が建てた石碑によると、貫河堂は群書を渉獵して漢詩に通じていたというから陶淵明の詩意が十分に反映されているはずである。本図は「帰去来図」として定型化された図容であるものの地方画人の卓抜した画量と教養を示すものといえよう。(堀江)



## 建築探訪

知らない町を歩くと、しばしば眼を惹く建物に出会う。鳥根出張の途上、台風の影響で岡山市内に足止めになったときのこと。「禁酒会館」という風変わりな名前前の建物を見つけた。明治から昭和初期の洋風建築に多いモルタル凹凸仕上げのドイッ壁に、ファサードの白タイルとマンサール屋根が特徴的な木造三階建てのビルで、登録有形文化財とある。面白いのは、建物に加えてその機能。現在、一階には喫茶店と聖書専門店が入っているのだが、喫茶店主によれば、同館は大正時代、文字通り禁酒運動を推進するための拠点として、岡山県禁酒同盟によって建てられたという。しかも喫茶店のスペースは、当時から食堂となっていて、会員たちが酒に代わる嗜好品として、「珈琲」を愛飲し、普及活動として、珈琲の出張サービスまで行っていた。そして、聖書専門店というのにも、禁酒運動の母体となっていたのが、熱心なキリスト教徒だったという因縁があるらしい。

大正時代、都市では、「カフェ」が大流行したが、それは珈琲ならぬお酒を出し、女給目当ての男性たちが集う歓楽の場であった。その同じ時代に、真面目に珈琲をたしなむ人たちがいたのであり、一つの時代の印として、興味深いものを感じた。(千葉)



編集後記 | 新館長のエッセーがスタートしました。毎号、知られざる作品やその逸話が紹介されることになります。どうぞお楽しみください。前号の「桃源郷追憶」のなかで、当館単館での海外からの借用ははじめてとの記載をしましたが、過去にも借用の実績がありました。私の着任以前のことで、当館が開館して、間もなく15年経とうという歴史を刻んできたことを改めて実感しました。(千葉)

# INFORMATION

## 三河浄土宗寺院の名宝

10月8日(土)～11月20日(日)

### ■講演会

10月23日(日)「三河浄土宗の二つの流れ」

新行紀一(愛知教育大学名誉教授)

### ■学芸員による展示説明会

10月22日(土)、11月12日(土)

※講演会・説明会いずれも午後2時から

### ■バスツアー「岡崎浄土宗寺院の名刹を訪ねる」

11月5日(土)午前9時30分～午後4時30分[雨天決行]

□申込方法/往復ハガキの「往信用裏面」に①イベント名②参加者全員(4人まで)の郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号、「返信用表面」に代表者の郵便番号・住所・氏名を明記の上、10月14日(金)までに、岡崎市美術博物館「三河浄土宗寺院の名宝 バスツアー」係宛てにお申し込み下さい。

### ■学芸員による館外講座

10月27日(木) ※午後2時から ※会場は岡崎市美術館東館2階講座室1

## 村山槐多の全貌

12月3日(土)～1月29日(日)

### ■基調講演・シンポジウム

12月3日(土)

第1部「鼎のこと、槐多のこと」窪島誠一郎(信濃デッサン館館主)

第2部「謎の大作《日曜の遊び》をめぐる」村山太郎(村山槐多の甥)・窪島誠一郎(信濃デッサン館館主)・原田光(岩手県立美術館館長)

### ■講演会

1月9日(月・祝)「新春・なんでも鑑定団スペシャルトーク」

永井龍之介(永井画廊館主)

1月22日(日)「夭折の天才、村山槐多の謎 - 引き裂かれた絵の真相」

村松和明(当館学芸員)

### ■朗読・演奏会

12月23日(金・祝)「槐多の詩 - 朗読とヴァイオリン」

川島葵(朗読・東海ラジオアナウンサー)

伊東かおり(演奏・ヴァイオリニスト)

### ■学芸員による展示説明会

12月11日(日)、1月28日(土) ※いずれのイベントも午後2時から

### ■学芸員による館外講座

10月27日(木) ※午後3時から ※会場は岡崎市美術館東館2階講座室1

### ■やさしいミュージアム講座の受講者募集

「いっしょに読もう!新編岡崎市史 額田資料編」(全5回)

11月～平成24年3月の毎月第2水曜日 10:30～12:00

当館学芸員、野本欽也・小林吉光(額田資料編調査執筆委員)

※ただし、2月の第2水曜日は臨時休館中のため第3水曜日に変更します。

「江戸の絵を愉しむ」(全5回)

11月～平成24年3月の毎月1度いずれかの土曜日 14:00～15:30

榊原悟(当館館長)

□申込方法/往復ハガキに、希望講座名(ハガキ1枚につき1講座の申込)・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記の上、10月20日(木)までに、岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係宛てにお申し込み下さい。

## 山の中のひととき

ここ数年、山の中にあるお寺や廃寺の来訪を続けています。冬場が中心で、蛇のでる時期はお休みです。車で往ける所なら大丈夫と、先月は一人で南山城を訪れました。数少ない丈六の白鳳仏と言われる釈迦如来坐像を見に念願の蟹満寺へ。薬師寺本尊に比肩される銅像で、堂々とした体軀、精緻な顔つきの中にも柔和さが感じられます。案内の人に痛いところがあれば、同じ場所をさすつてと言われ国宝に触れてしまいました。信仰の寺ならではの出来事でした。

次に向かったのが神童寺。未知の寺ながら役の行者の名前の記された観光パンフに惹かれ、谷筋の集落にある山寺へと辿り着きました。任職の案内で、本堂、収蔵庫と見学。室町時代の蔵王堂は重文の現本堂で、大型の蔵王権現像が鎮座していました。護摩壇横の収蔵庫には平安時代からの仏像がずらりと並び、内六駆が重文で驚きました。古代以来、多くの堂坊が立ち並ぶ、山林修行、修験の一大拠点であったようです。小雨の中、落ちていた面持ちの集落を抜けその先の鎮守へ。ここに元本堂があったとの話で、集落を振り返ると大寺院であった往時の姿が浮かんできました。過去から現在へと繋がる歴史空間に浸った一日でした。(荒)

## おしゃべり、あれこれ。

### パワースポット

八月の或る日、大学同期の五人で岐阜県関市の旧洞戸村・板取村山中にあるパワースポットの地を巡ることとなった。きっかけは友人が洞戸に別荘を持っているので、そこで同窓会を兼ねてBBQパーティーをやろう!という呼びかけだった。その彼女は米国在住で帰国中、いつもの如く直前の呼びかけだったが、久しぶりの再会を祝しながら用意した食材を食べ尽くし、そして、なんとなく彼女の案内でパワースポット巡りとなった。

岩門不動の滝に始まり、円空仏と妖怪さるとらへび伝説をもつ高賀神社・大霊界で知られた俳優故丹波哲郎氏の別荘、トトロの森のような21世紀の森公園の大杉株など、板取川沿いを車で廻って行った。ちょうどゲリラ豪雨が頻発していた時期で足元は滑り易く、とつぷり日暮れても山中を徘徊する私達は、人目があったならばさぞかし怪しげに映ったことだろう。全員汗だくになりながらも、たつぷりのマイナスイオンを堪能し、最後は板取川温泉に浸かって日常から解き放たれるような心地よいパワーを貰った気分になって帰路に着いた。

巷でブームになっているが、思いがけない体験をくれた彼女こそが、この夏、私達の一番のパワースポットであったのだと思っている。(伊)

表紙図版：村山槐多《バラと少女》1917年 東京国立近代美術館蔵



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第50号 2011年10月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高陸寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA